11A-1

工大祭参加記録

今年もサイクリング部は、工大祭に甘酒屋を出して参加した。実際の仕事を行ったのは、新入生（富田　金谷　栗原　沢木　名取　玉谷　鈴木　計七人）だけで、また準備期間も短かったので、非常に忙しかったが、それだけに楽しかった。

十月二十日　（工大祭前日）

この日までに、ようやく売り物の準備が終わった。団子も店に注文したし、一週間もまりかかってようやく、大部分の甘酒が完成した。午頃から、食器の手配や看板書きを始めた。この頃から雨が降り出して、翌日の天気が心配された。晴くなってからこの雨のを、角材を持って飛び上がったり、看事をしたりして、やっとの思いでテントを張って店を組み立てた。これでこの日の仕事も終わった。そこで、前夜祭の五輪貞弓コンサートを、当クラブがその入場係の仕事を担当している関係上、皆で無料で聴いた。しかし無料とはいっても、コンサート後、演奏道具の後片付や演奏者達の茶汲みを行った。それも終えて皆でたむろしていると、日出野さんと富田君が、茶汲みをして楽屋から戻ってきて、「五輪貞弓の着替えを見てしまった。」と言い出した。しかしよく聞いていると、靴下をはく所を見たのだそうだ。

十一月一日　（工大祭初日）

いよいよ昨少し前から開店した。しかし、誰も買いにこない。呼び込みの金谷君が、二三人連れを

を呼び込もうとするのだが、皆逃げてしまう。ただ、どこかのおばあさん一人だけが、団扇がないので顔面に火の粉を受けながら直接口で息を吹きかけ焼団子の火をおこしている沢木君と名取君の姿を見て同情し、帰りがけに買っていってくれると約束していった。

ところが、おやつの頃に売ってくると、状況が大逆転した。つぎのようにどんどん売れた。焼団子が注文に応じきれず、団子を焼いている前には、常に二、三人の客が自分の順番を待っていた。

一方、留谷君と栗原君担当の甘酒売場では、その頃甘酒の失敗作が出回った。焦げて、薄茶色に染まり、チーズの焼けた時の匂いがするのだ。これに対して二人連れの客が文句を言ってきた。杉浦さんが、「これが、天然糀からつくった甘酒独特の味で、酒粕からつくった甘酒しか飲んだ事のない人にはわからないのだ。」と説明すると、その客さんはしぶしぶ帰っていった。

以後この甘酒は販売中止となった。

暗くなってからも売れ行きは止まなかった。近所の小中学生が、しつこく一人で何回も買っていった。後ろが甘酒屋の他にやっている貸自転車で、そこら辺を一回りするたびに、団子を一本ずつ買ってゆく子もいた。

店仕舞する頃、どこからか、酔っぱらっていい気分になった中村さんがあらわれて、何と四千円もかこばたと言って置いていった。中村さん自身この事をしゃべって日比野さんに教えてもらうまで全くわからなかったそうだ。

十一月二日（工大祭最初日）

この日も、第一日目と同様に午後によく売れた。甘酒と焼団子の他に、冷や酒とコーヒーも売り出した。また、麻雀牌を貸出しテレビを置いた。丁度、日本シリーズの中継をやっていたので、たくさんの人が集まった。後には、一人で焼団子を十五本も買う人や、お釣り七百五十円をカンパしてくれるおばさんもあらわれた。

十一月三日（後片付、打上げ）

明るいうちに後片付を終えて、夕方頃から打上げコンパを始めた。このコンパでは、名取君が乗りに乗って、踊り唄をしたり、長いすの上で腕立て伏せをしたりして、とてもにぎやかだった。

114

こうして、工大祭に関する事がみんな終わった。明日からまた平凡な生活に戻るのかなと思うと、何だか気が抜けてきた。

MEMO

東工大サイクリング部